

五十年経て従軍記書かむと吾が思ふ今しかないと心せきつつ

作者プロフィール 加藤静枝（大正十三年〈一九〇四〉～平成二十四年〈二〇一二〉）現・桑名郡木曾崎町生まれ。昭和十七年（一九四二）一月、赤十字病院に勤務中に召集令状を受け、フィリピンへ。戦後帰国し、結婚して四日市川原町に移居。後に「四日市ぜんそく」となり公害患者に認定された。闘病しながら昭和五十八年から「三重アララギ」に、次いで「アララギ」に入会して作歌に精励。平成八年、常磐井猷麿序の『ルソン哭泣 従軍看護婦の手記』を出版。

⑫ 辺見じゅん『男たちの大和』抄（『男たちの大和』角川書店、昭和五十八年）

内田貢は、意識が朦朧となったまま、人々の入りまじった佐世保の海軍病院の片隅に、忘れられたように横たわっていた。内田が意識を取り戻すのは、脇腹に注射針を無造作に差し込まれるときである。そのときだけは、わずかに意識を取り戻した。しかし、何をされているかはわからなかった。内田はものも言えなかった。

内田の軀（からだ）は、全体が異様にゴム人形のようにふくらんでいた。右足は太股（ふともも）から第二関節へ弾が貫通、右肩から左肩に、首の後ろから腋の下に、また胸にも無数の鉄片が食いこんでいた。その上、肋骨は左六本、右二本が内側に折れ、生きているのが不思議な状態だった。

内田は丸太にくぐられて海へ入った。だれが丸太にくくりつけてくれたのか内田の記憶にはなかった。

内田は海に引きずり込まれ、気がついたときには海中に漂っていた。かなり長い間気を失っていたのか、「大和」の爆発も知らない。喉をやられていたことがかえって幸いしたか、ほとんど海水を飲んでいなかった。

海の上で、内田はくるくる軀が動いた記憶がある。内田は左腕を丸太にくくりつけられていた。右腕は怪我をしていたが、無意識に動かしていた。内田の軀に兵隊の死体がぶつかった。海中で死体はかたまりあった。彼の右手は死体のバンドを引き抜き、丸太に自分の腕をしばりつけた。

内田はどのようにして救助されたかも、駆逐艦の艦名も覚えていない。のちにいろんな人から聞いてみると、内田が助けられたのは「冬月」ではないか、という。救助されたときにもものも言えなかった内田は、だれかが戦闘服のネームを見て、唐木か、と言ったのをおぼろに記憶している。佐世保だったかで、

唐木は戦死したはずだ、じゃ、これはだれだ、という会話が交わされているのをうすぼんやりと記憶していた。

「大和」が沈没して一か月近い五月五日、新緑の鮮やかな呉の二河（にこう）公園に生き残った者たちが集まった。生存者の半数以上は重傷者でまだ入院中なのか、集まったのは、一〇〇人ほどだった。彼らの中には、三笠逸男も丸野正八や鬼頭光吉も、そして内田貢の姿も見えなかった。

（中略）

四日市は、どこも焼け野原だった。

病院から戻った内田は、軍医に渡されたという手紙をもっていた。親に渡すように言い渡されていた。内田は開封せず、父親に見せた。その手紙の内容を彼自身は、知らない。彼の妻は、内田の父親から内密に聞かされた。その手紙には、内田の軀はもう二、三か月しか持たないと書かれていた。

（中略）

内田も弟たちも朝から晩まで働いた。戦争であれだけの重傷を負い、軍医から二、三か月しかもたないといわれて帰ってきた内田がその三か月間、開墾に従事できたのが不思議だった。周囲の者が土地を耕すのに半年費やすところを内田たちは三か月でこぎつけた。しかし、芋のツルを植えたものの、収穫時になって根のほうに手をつっこみ掘り返してみると、痩せた小さな芋が申しわけ程度に出てくるだけだった。彼らはどのように肥料をやればよいか知らなかった。先住者たちの畑には、まるまる太った芋がなっていた。

（中略）

内田はもう二十七歳になっていた。開拓団から戻されると、どこか働きに行かねばと考えた。すでに内田の実家には、春枝もきていた。籍は入れてなかったが、女房であった。春枝と内田の妹は、ほったらかしにしてきた湯の山の小さく痩せた芋をもったいないといって、掘りに出かけたりしていた。

内田は名古屋タイムスで北海道の炭鉱夫を募集しているのを知り、応募した。国営の夕張炭鉱だった。職のない大勢の若者たちが試験場へ詰めかけた。身体検査で、眼帯をとれと言われた。内田が眼球がないというと、

「なに、片端（かたわ）か。片端はいらん、帰れ、帰れ」

と言われた。

内田は腹が立ったが、

「わし、仕事は人に負けしません」

「おまえ、何をいうとる。五体満足の者がいくらかもおるのに、片端者などいらん、じゃまや」

別の面接者がいった。

そうか、片端者はいらんのか。

「片端者いうてくれたな。そんなら何人でもいいからかかってこい。それでわしが負けたら、素直に帰っていくわな」

内田は試験管たちの坐っていた机をひっくり返した。

(中略)

内田は人混みにまぎれて、その試験場を出た。

名古屋市の広小路あたりまで来たとき、内田の怒りは収まっていた。寂しさが軀を吹き抜けた。

明るい昼下りだった。ふいに、内田の目に涙があふれた。眼球のない左眼も泣いていた。

「わしは、なにも好きこのんで戦争に行ったわけやない。好きなときに引っぱってって国営の炭坑の募集でも、片端はいらんいうんか」

内田はなんでオレは死んでこんかったんや、と思った。内田のなかで、これまで張りつめていたものが、ボロボロと崩れ去った。

その晩、内田は熱を出した。高熱だった。片端者はいらんといわれたひと言で、内田から、はじめて生きる意欲が退(ひ)いた。軀までが参ってしまった。

「大和」で生き残った内田は、病院を転々とした。軀は傷だらけだったが、心の底に負けるものかという張りがあった。しかし、もう、自分は何もかも空(から)っぽのような気がした。

作者プロフィール 辺見じゅん (昭和十七年〈一九四二〉～平成二十三年〈二〇一一〉) 歌人、ノンフィクション作家。富山県の生まれ。早稲田大学文学部卒業後、編集者を経て歌人・作家として活躍。『男たちの大和』で第三回新田次郎文学賞、歌集『闇の祝祭』で第十二回現代短歌女流賞、『収容所から来た遺骨』で第十一回講談社ノンフィクション賞・第二十一回大宅壮一ノンフィクション賞、『夢、未だ尽きず』で第九回ミズノスポーツライター賞をそれぞれ受賞。他の著作に『呪われたシルク・ロード』『ふるさと幻視行』『昭和の遺書』など。